

〈研究ノート〉

# 日本語以外の言語を母語とする子どもと日本語教育

— 日本語指導における母語使用の必要性 —

蘇 曉 翠

キーワード：日本語学習，日本語指導，漢字学習，九九の練習，母語の勉強

## 1. はじめに

日本語以外の言語を母語とする子ども（以下，子どもと呼ぶ）に対する施策の歴史が浅い日本では，学校生活の中心となる教育問題について，多くの問題が残されており，その子どもたちの母語や母文化の喪失という問題まで対策を講じられないのが現状である。本稿では，日本語学習および教科学習などの学習サポートのうえで，どのような問題に遭遇するかについて，参与観察で得られた知見を報告する。

## 2. 観察対象及び調査方法

対象は，小学3年生（9歳）の中国語を母語とする女子児童（以下，Tさんとする）である。Tさんは中国で小学校2年生に半年程度通って，2008年2月来日した。観察開始時には日本の学校での日本語指導により，ひらがな・かたかな・小学1年生の漢字は習得済みであった。週1回Tさんの学校に赴き，日本語母語話者の日本語指導者（以下，日本語指導者と呼ぶ）と1対1で2時間程度行う学習サポートに中国語母語話者の筆者も参加し，適宜中国語で説明を加える形で観察を行った。学習内容は，主に漢字学習と九九の練習を中心とした算数，国語などの教科に関わるものである。

## 3. 結果および考察

漢字文化圏の中国から来たTさんと言っても，1年生の漢字から学ばなければならなかった。

Tさんの漢字学習は，外国人の子ども向けに作られた小学2年生の漢字練習用のワークブック（「かんじだいすき（二）～日本語をまなぶ世界の子どものために～」国際日本語普及協会）に沿って，まず新しく学習する漢字の意味を理解することから始められた。いくつかの漢字について，理解するのが難しいものもあった。例えば，日常生活の上であまり使われていない，抽象的な単語や複数の意味を表わす単語，日本語特有の表現などの理解が難しかった。例を上げてみると，小学2

年生の漢字の里，戸，広場，用，当番，交通，車，引く，当たる，台などである。中国語にないもの、意味の違うものは日本語での理解が難しいらしく、すぐ中国語を介して覚えたり、理解したりしようとする。

算数では、掛け算が完全にできなかったため、日本語指導者の判断で「母語の九九」を暗記することとした。Tさんは中国で掛け算は学習済み（中国語による指導）であったが、完全に習得しておらず間違いも多かった。毎回口頭で九九を言わせるようにしていたが、間違いには、単に正確に暗記できていないこと以外に、共通点があることが観察できた。例えば、 $3 \times 7 = 27$ 、 $4 \times 6 = 27$ 、 $7 \times 2 = 17$ 、 $8 \times 9 = 42$ （解答はTさんによる誤答）など、Tさんにとって、数字の概念と音の組合せは4（ヨン）、7（ナナ）で、覚えており、4（シ）、7（シチ）という読みは日常会話にもあまり無いために、混乱を引き起こす原因となっているものと思われる。スムーズに発音できないとリズムがあわないので、口ずさんで覚えにくい。慣れない言葉での暗記は、小さなことで障害につながり、想像以上に時間と訓練が必要な難しい作業であった。日本語では一ヶ月たっても、覚えられなかったため、母語で九九を暗記することにしたところ、一週間で暗記できた。これは日本語指導者によれば「例外的な早さ」だということである。

また、算数の文章題を解くためには、計算の知識の他に読解力が必要になる。そのため、計算方法を知っていても、文章題になると解答できないことがある。文章題には独特な言いまわしが使われるからである。算数の文章題でTさんが理解できなかったうちの一つは、助数詞である。助数詞は、外国人の子どもが苦手とする分野の1つである。

問題文が以下ようになっていた。「すずめがでんせんに19わとまっています。そのうち5わとんでいきました。でんせんにとまっているすずめはなんばになりますか」（下線筆者）。

この問題では設問の単位が「ば」で、答えのすずめの数14に対応する「わ」になっていない。この問題に誤答したTさんは、「日本語指導者の解説を聞いたら、自分が理解できていなかった部分すぐわかる。同じ問題が母語の勉強のときも出された。そのとき、正解だったのに、日本語で問題にしたら、日本語がわからないから、できなかった。日本の漢字でも、半分以上意味がわかるから、算数の問題もできるだけ、ひらがなではなくて、漢字にしてほしい」と言っていた。

#### 4. ま と め

Tさんは「話すことができて、漢字を書いたり、読んだりできないので、授業には全くついていけないし、穴を埋めるのもすごく大変。もっとレベルにあった勉強（漢字練習や母語の勉強）をやってほしい。」「学校で使っている教科書が母語で訳してあるといい」と語っていた。今回の事例から考えると、子どもたちは、母語を介して教科学習を理解しているので、言語や学習の背景が多様化する子どもたちに対応するためには適宜母語を使った教科学習の補習を主目的とする日本語指導を行うのが、望ましいと考える。また、将来的には母語保持のサポートをも行うことも視野にいれるべきではないかと考える。

#### 謝 辞

本稿調査では、千葉市教育委員会指導室の方々にご協力いただきました。心から感謝の気持ちを申し上げます。